

フレッシュチェックおよび子宮内ポピドノード注入による繁殖成績の改善効果

畜産総合センター こじましゅうすけ 小島 秀介 ほか

【背景と目的】

繁殖成績は畜産経営に直結する重要な要素である。繁殖成績に影響を及ぼす主要な要因として生殖器疾患がある。中でも、潜在型子宮内膜炎（以下、潜在型 EM）は外陰部からの膿汁排出など特徴的な臨床症状がなく診断が困難であり、実際の飼育現場では見過ごされている可能性が示唆される。当センターでも潜在型 EM の実頭数は把握していなかった。

昨年度の調査で、分娩後乳牛の約 30%が潜在型 EM に罹患していた。潜在型 EM 診断と直腸検査、膣検査の間には相関性がなく、その診断にはサイトブラシが必要であることが判明したが、設備面・労力面から臨床現場での実施は困難な状況である。また、子宮内ポピドノード（PVP-I）注入は、EM に対し短期的な治療効果があることが示唆された。

畜産総合センターでは、潜在型 EM 対策と繁殖成績安定のために H29 年度から分娩した乳牛全頭に対し、分娩後 35 日前後で行う卵巣および子宮の状態チェック（フレッシュチェック：FC）および子宮内 PVP-I 注入を実施してきた。

そこで、今回 FC および子宮内 PVP-I 注入が繁殖成績に及ぼす影響について、実施以前と以後で長期にわたる繁殖成績を比較した。

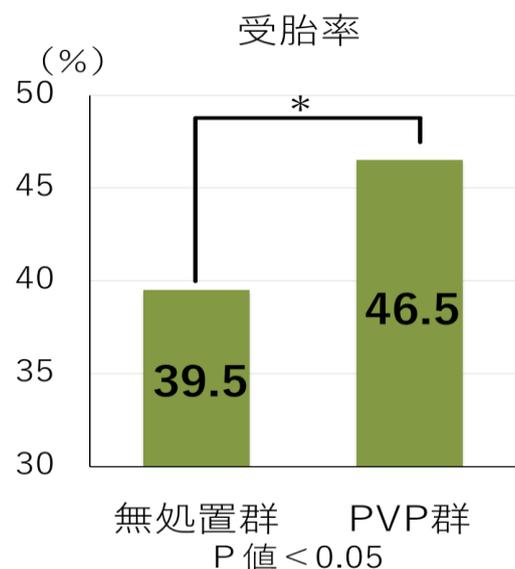
【方法】

H26 年度から R1 年度に分娩した 243 頭を、分娩後、FC および子宮内 PVP-I 注入を行っていない群（無処置群：H26～H28 年度）、FC と子宮内 PVP-I 注入を行った群（PVP 群：H29～R1 年度）に分け、受胎率、初回授精日数、分娩間隔それぞれを比較した。

【結果】

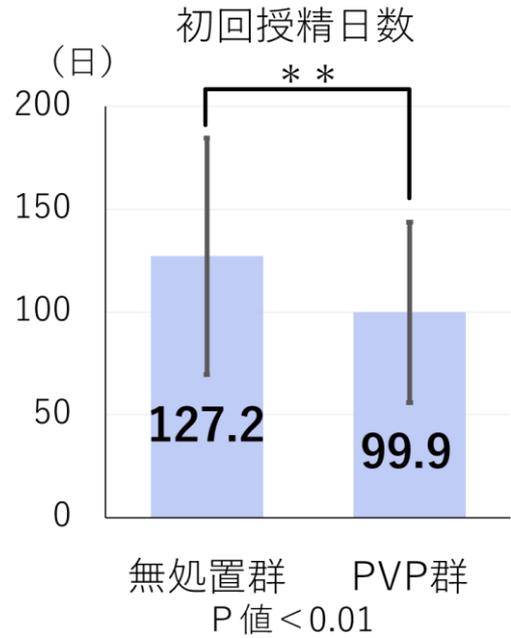
(1)

受胎率は、PVP 群（46.5%）が無処置群（39.5%）と比較して高かった（ $P < 0.05$ ）。



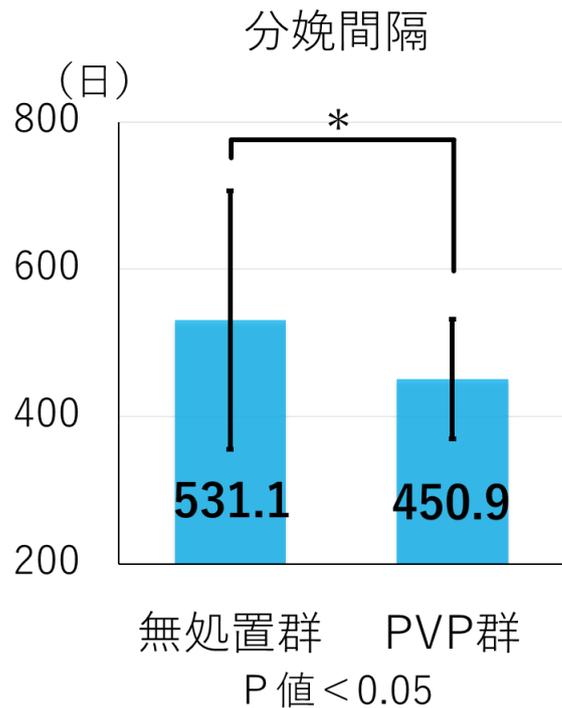
(2)

初回授精日数は、PVP 群 (99.9 日) が無処置群 (127.2 日) に対して短縮した (P<0.01)。



(3)

分娩間隔は、PVP 群 (450.9 日) が無処置群 (531.1 日) に対して短縮した (P<0.05)。



【考察】

子宮内 PVP-I 注入により発見が困難な潜在型 EM が治療され、受胎率が向上した。また FC で卵巣・子宮の状態確認をすることにより、初回発情の早期発見の意識が高まり、初回授精日数が短縮された。これらの複合作用により、結果として分娩間隔が短縮し、繁殖成績が改善した。

よって、当センターは分娩後 35 日前後での全頭 FC および子宮内 PVP-I 注入を推奨する。